
恋の遺伝子

上口司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の遺伝子

【コード】

N0409H

【作者名】

上口司

【あらすじ】

宇宙生物学が好きな誠治は、変わった奴として有名な陸上部のトモミに図書室で声をかけられた。今度は俺が被害者になるのだろうか。

「あれ、誠治じゃん。何読んでんの？」

「わわっ……驚かせんなよ」

奴が突然肩越しに首を突っ込んできたので、俺は白々しい程に慌てふためいた。

まさか陸上部のエースがこんなところに来るとは思っていなかったのだ。

「どうしたんだよ、何か用？」

長く伸びた髪を垂らしながら覗き込もうとする奴の顔を、俺はとりあえず押しつけた。

「別に。そこにいたから、ただ声をかけただけじゃない」

「部活は？」

「今終わったとこ」

「早かったんだ」

とにかく机の上にあるものに触られたくない。

そう思った俺は、適当な会話をしつつ後ろに向き直って、散らばったノートやら本やらを掻き集めて仕舞おうとした。

「なあ、ちよつとここで話すと騒がしいから、別の場所に行こうぜ」

「ちよつと待って、今何か隠したでしょ。見せなさいって」

「おいトモミ、ちよつと待て」

智巳は少しイライラした様子で俺の手を払いのけて、目の前の自習机にその細い腕を伸ばした。

「ここ図書室なんだから、もう少し静かに……」

そう言っている間にも、奴は勝手に取り上げたノートをペラペラとめくっていた。

俺は頭に手を当てて、ため息をついた。

「分かったよ。そんなに見たいなら見てもいいけど、大して面白いもんじゃないよ」

俺は諦めて、肘から先の両腕を上げた“降参”のポーズをとった。
ところが奴の反応は意外だった。

「へえ……中々良いじゃない」

「え？」

どうやら奴は俺の“研究”に興味を持ったらしい。

「宇宙生物学？」

俺は今、奴と一緒に購買近くに設置された自販機へ向かって歩いている。

図書室の外にあるベランダから非常階段を下りて、智巳を連れて一旦グランド脇に出ることにしたのだ。

奴はといえば、俺の隣でさっきからずっと俺から奪ったノートを
楽しそうに眺めている。

だが、しかし暑い。天気予報によれば、本日の最高気温は32
だそうだ。

うだる様な暑さの中外に出てしまったことを、俺は瞬間で後悔した。
そして、人に注目されたくないがために、「外に出て散歩が
てら話すか」とか軽々しく言ってしまった自分が恨めしくなった。

「そう。英語ではアストロバイアーラジイ。なあ、ノート返せよ」

「ふーん、アストロバイアーラジイ、ねえ」

奴は俺の言うことを無視しつつ、唇をやたらはつきり動かして口
真似をしてみせた。

「茶化すんじゃないよ」

「いや、似合わないなって思って。暗唱例文テストいつも追試受け
てた誠治が、英語の話するなんてさ」

「余計なお世話だ」

「それにこの絵。良い味出してるじゃん」

それは俺が未来生物を予測して描いた絵だ。正直絵が下手なので、
これだけはあまりじろじろ見て欲しくない。

「うるせえよ。早く返せ」

「返してあげないよ〜だ」

奴は少々頬の血流が良くなった俺の顔に、ふふつと得意げな笑顔を浮かべたその顔をぐつと近づけてみせた。

俺はつい、奴の顔を正面からじっと見つめてしまう。

うーん、確かに可愛い。

俺は頭に浮かんだその考えを全力で打ち消すと、咳払いをした。

「日本じゃあんまり盛んじゃないから、海外の文献読むしかないんだよ」

「大変だね〜」

ようやく奴の顔が離れた。認めたくないが、何故か落ち着く俺。

「なあ、クソ暑いからやつぱ戻ろうぜ」

「ここまで来て引き返すのも馬鹿らしいじゃん。ほら、後もう少し〜」

奴は暑さも気にせずレッツゴー、とか言って鼻歌を歌い始めた。

大体俺は夏っていう季節が嫌いなんだ。

俺は、裏山から聞こえる蝉の大合唱も、プールも風物詩とか言っ
て美化してまで好きになれない。

しかもなんだってこんなうっさいのと一緒にいなきゃなんねえんだ
よ……。

俺は、クラスメートの知り合いの男子が、教室の席替えて奴の隣
になったせいで目覚めそうになった、とぼやいていたことを今更思
い出した。

俺は今までの経過を、とりあえずざつと頭の中で整理してみる。

智巳は、俺と同じクラスにいる唯一の母子家庭で育った陸上部員
だが、同時にちょっと変わった奴としても有名だった。

あっちこっちに行っっては、学年中のいろんな男子に声を掛けてい
るらしいのだ。

しかも一体どういうわけか、とにかく他の人間が絶対に興味持た

ないようなマニアックな話になると、ものすごく興味を示して聞き入ってくるという話だ。

でももっと不思議なのは、奴の態度が別にその男子が好意があるというわけでも何でもなく、単に話が聞きたいだけのようにも取れる、ということだった。

俺は一年の時もクラスが一緒だったので、奴の性格とかは重々承知だが、それがなんでなのかは知らなかった。

でだ。そこで問題なのは もう説明しなくても分かると思うが そうされた男子の多くが奴に対して勘違いしているということだ。

別に奴の容姿が普通ならいいが、奴は女子からも人気あるぐらい文句なしに可愛い。

前も、付きまとわれて困ってるけど嬉しい、とか言ってるのいたな。

今度は俺か……俺なのか……

差し詰め俺は今年に入ってから奴の被害者第五、六号ってことだな。

そんなに嫌がってるなら、なんで話しかけられた時に無視しなかったのかって？

調査結果を記録したノートを奴に取り上げられたのもあるが、それだけじゃない。

奴にもう少し常識をわきまえるように忠告しようと思ったからに他ならない。(違えよ、本能という名の悪魔の囁きに耳を貸したりしたからじゃない)

奴の気ままな行動や言動に振り回されて、疲れてる人間がいつぱいいると今日こそは言っただけでやらなくてはならない。

実を言うと、以前知人の一人から、奴のことを考えると頭がおかしくなりそうだ、とかいう意味の分からない相談を受けたりして、俺は二人の人間に挟まれた共通の友人として前々から手を貸そうと模索していた、ということもあるのだ。

つまり、なんで奴が色々な男子の話を聞きたがるのか突き止めようというわけだ。

まあ正直収穫が得られるかどうかは分からないし、もし他の誰かに今のこの状況、つまり奴と二人つきりできるところを見られたら、どう思われるかも知らないが……

いずれにせよ、俺が今かなり権謀術数を巡らして考えごとをしているのは理解できたと思う。

「はい。ジュース買ってきたよ、トモミ」

ベンチに戻ってきた俺の手には、汗をかいたスチール缶が二本。

俺は結局奢らされたのだった。

「ありがとう」

奴は分かりやすい大げさな喜び方をしながら、そこから少し離れたベンチに座った。

そして俺は奴に缶を手渡しながら、あえて自販機のすぐ傍にあるコンクリートブロックの上に腰かけた。

その時の俺は、建前では「緊張のせいかよく喋っていた」ということにしてある。

(本音を言うと、脳内で「警告！ 理性崩壊の危険」と書かれた赤いランプのブザーが鳴ってしまうので止める)

俺は口では話しを続け、頭の中ではあのことをどう切り出そうかとばかり考えていた。

だが奴はそんなことお構いなしで、宇宙生物学について興味の赴くままに色々なことを尋ねてきていた。

「そうすると、地球外生命体って今まで発見されたことは本当にないの？」

「いや、完全にそうとは言い切れないんだ」

「ホントに？」

俺は奴が今持っている使い古された何冊かのノートの内、一冊を手にとって英字新聞の切り抜きが貼ってあるページを指さして見せ

た。

「例えば1996年にNASAが調査した火星の隕石の中に、バクテリアの化石らしきものが発見されて大騒ぎになったことはある」
奴は口をつけていたカルピスソーダから顔を離して、記事を読み出した。結構驚いているようだ。

「写真はないの？」

「今ちよつと持つてないね」

「じゃあそれどんなカタチしてたの？ いかにもって感じ？」

「残念。もし生命体だったとしても非常に原始的な単細胞生物。実際、電子顕微鏡じゃないと見れないくらい小さいんだ」

「なあんだ、つまらないの」

ちよつと関心を失ったのか、奴はまた運動場の方へ視線を戻した。

「ね、でもどんなカツコの生き物になるかって予測できないの？」

ヤバい。こんなこと考えんじゃなかった。俺は飛んでいた意識を引き戻して、

「それは難しい注文だよ」

と、いかにもよく訓練された知性溢れる教養人、みたいな顔をしながら講義を再開した。

「まあまず地球上の生物の多くが、水素、炭素、窒素などで構成された有機物からできてることは知ってると思う」

「それは化学とか生物習う前から知ってるよ。なんかの漫画で読んだ」

「でもな。地球の様な惑星で、生命が誕生するとは限らないだろ？」

俺は一口ファンタグレイプを飲んで唇を濡らすと、得意げに暗唱した知識を諳じた。

「同じ太陽系の惑星でも、金星の様に何百度もある高温高压の大气に覆われたものから、平均気温-55の火星みたいなまでバラエティに富んでるっていう有様だ。」

衛星も含めるなら木星のエウロパ、土星のタイタンがあるけど、結局タイタンの方はカッシーニから分離した探査機ホイヘンスが地

上にメタンの湖が蒸発した跡を確認したんだとかなんとか。

でも絶対温度95K^{ケルヴィン}じゃ生命体を発見するのは困難だろうね……」

「ふーん」

ぶつぶつ一人ごちた俺に、理解できているのか分からないような虚ろな返事をする奴。

「まあ話を戻して言いたいことを要約すると、構成する物質が違えば形も相当違ってくるってことだよ……そうだね、ケイ素生物って聞いたことある？」

「ある様ないような……」

「さっき言ったように、地球上の生物は炭素からできた生物なんだ。これを炭素生物という」

「うん」

「しかし、ケイ素も炭素と似たような性質を持っているし、生命体の材料として炭素の代わりを果たしてもいいと」

「つまりある程度環境の整った惑星になら、ケイ素を主な構成物質とした生命体が誕生してもおかしくない、ってことね」

「その通りだ。素晴らしいよ、トモミ君」

「やったー！　なんか頭良くなったみたい！」

「具体的なカタチの話をする、ケイ素生物は炭素生物よりも硬い岩石のような体になるかもしれないとか、色々予測はされてるけどね。」

まあ地球上でも体の一部がケイ素でできてるのもいるから、これは例えばその惑星の環境と地球の環境が似通っていても発生しうる事態だけど」

「へええ〜」

俺は童心に帰って喜んでる奴を見ながら、奴のペースで舵を取られそうになっている自分に気がついた。

ここからは丁度、奴の部活の活動場所であるグラウンドが一望できる。

空に浮かんだ入道雲は、まるで化学室で見た水に入れたドライアイスのようだ。

まあここは地球だし、撰氏にして30度以上もあるこの地上には、メタンの雲から-170度の雨水が降り注ぐこともないのだが。

日陰から見える景色の平和さに浸りながら我を失いかけた俺は、それより先に重大なことを言い忘れていたことに気がついた。

「おい、トモミ……」

「教授！ 質問があります！」

俺が何か喋ろうとしたのと同時にこれだった。

「なんだよ。俺それよりお前に質問があるんだけど」

奴が物憂げな目をし始めたので、俺は当面の防衛策として視界を遮断した。

奴の少し拗ねた様な曖昧な表情、そして上目遣いをするくりつとした黒い瞳は、こういう時においてはどんな武器よりも優れていると思う。

「い、言いたいことあんなら先に言っていいいから、これで最後にしてくれよ」

「分かりました！」

「どうぞ。答えられる範囲で教えてやる」

「もし異星人がいるとしたら、地球人と似ているってことはありえるの？」

難しい質問来てしまった。時間を懸けて考えたいところだが、ここは宇宙生物学者の卵としての名に懸けて……

「うーん、そうだねえ」

時間稼ぎしながら、俺はレトリックで適当にごまかすことにした。

（仕方ないだろ！）

「要は、知的生命体っていうことだよな」

「そうだよ」

「実を言つとね、それは十二分に起こりうることなんだ」

「え、それすごくない？」

そう言った途端に奴が興奮し出した。俺は奴の反応を見てにやりとしつつ、話を続けた。

「銀河系には、太陽系のような星系が数多とあるわけだが、その中でも地球と似たような環境の惑星が十個はあると言われている」

「でもさつきは、カタチが似てくるかどうかは分からない、って言うてたじゃない」

「まあ焦るな、収斂進化という言葉がある」

「シユウレンシンカ??」

俺はその辺の小枝をとって、土に漢字を書いた。奴は缶を片手に席を立つと、俺の目の前でしゃがんだ。

「ぎゃつ、何これ?」

「まあ多分高校生じゃ習わない字の一つではあるな」

俺は噛み砕いて説明を始めた。

「モグラとオケラって、手の形状とか全体的な体の形良く似てると思わない」

「オケラって田んぼにいる奴でしょ? それが?」

「でもモグラは哺乳類で、オケラは昆虫だ。何故違う種類の生物なのにそっくりなんだと思う? 同じ様に土を掘って暮らす生き物ではあるけどな」

「もう言いたいこと分かった」

奴は再び立ち上がって、俺を見下ろす様な位置に出た。

「つまり収斂進化っていうのは、同じような環境を生活の場にする生き物が、自然とその形状において似る様に進化するっていう意味だ。

他にもイルカと魚竜とか、様々な事例が報告されているんだ」

「宇宙でも同じ様なことが起きるかもしれないの?」

「そうだ。宇宙で暮らす知的生命体、それが“異星人”と呼べるなら、多分似たようなカタチしてるんじゃないかな」

「ふん、でも壮大すぎて、なんか信じらんない」

「俺はこれぐらいしか答えられないよ」

取りあえず話に収拾をつけ、俺は一息ついた。

「ねえねえ、異星人は地球人みたい恋をしたりするのかな？」

奴がそよ風に髪を靡かせた横顔で、徐に語り出す。

「さあね。けど、雄雌の区別があると、単位生殖で問題になるような遺伝子の組み合わせが偏るって現象が起きにくいから、何気に便利なんだよ。」

だから異星人も、雄雌とはっきり性別が有るか分からないけど多分何かしら似た様なシステムを採用してるんじゃないかな」

「やっぱりそうかなのかな？ あると思うんだよ、恋の遺伝子って」

そう言われても、俺は何一つピンと来なかった。

まあ、意図を図り兼ねる不可解な言動、なんていつものことだが。もしそうならロマンだね」

しかし俺は、遠い異郷者たちの恋に思いを馳せている奴に対して、ここでちよつと補足をおこななければならなかった。

「それに、地球人が望んでいるような知的生命体が実在したとしても、我々は会うことができない」

「なんで？」

「宇宙の歴史は130億年あるんだ。その中で人類の歴史なんてたった1万年ぐらいいかないのに、全く同じ時代に知的生命体が誕生して文明を築いたりしているとは、とても考えられない」

「確かめようがないってことか……」

奴はがっかりしたような顔をして、すでに飲み干した空き缶をゴミ箱に捨てた。

「で、聞きたいことってというのは何？」

奴は俺の前に急に向き直ると、仁王立ちしてそう言い放った。

会話の展開が物凄い急ブレーキ&ハンドルさばきだったので、俺は何故か押し黙った。

「話しなさいよ」

「まあ、大したことじゃねえよ」

「嘘」

「結構大したことだな」

俺は奴の反応を窺いつつ、ここを離れることにした。

「ちよつと……その辺歩きながらにしようか」

俺たち二人はそう言っつて、再びあの夏の日差しの下に出た。

先ほどから気まずい空気が流れている。

奴は校舎の隅に設置された非常階段へと向かう道の途中、グラウンド脇の植木のブロックの上をバランスをとりながら歩いていた。

鬱屈とした心持でいるせいか、自然と炎天下の暑さはあまり気にならない。

どうする？ 何て言えばいい？ 俺にはやっぱりそういう役回りは無理か？

「このノートいつからつけてるの？」

混乱している内に奴に先を越された。俺はまた何気なく会話を続けてしまう。

「高校入ってからずっと。一人で調べてたんだ」

「へえ〜すごいね」

「いや、自分でも変わってると思うけど」

「なんか今度講義してみせてよ。誠治が教授で、生徒役はトモミ、つてな感じで」

「そんな大層なことできないよ」

奴のテンションにはついていけないが、それも悪くないという気もしてきている……はずない、ない。うん、ないよ。あり得ない。

俺はこれ以上話を長引かせないためにも、単刀直入に始めた。

「なあ、智巳。お前に言っつておかなきゃなんないことが」

「どうして色んな男の子に付きまっつては、話を聞きたがるのか、つてことでしょ？」

俺はその言葉を聞いて立ち止まった。

奴は完璧に俺が心の中で考えていた台詞を言い当てた。

そして一段高いコンクリートブロックの上から、「なに、違うの

？」とても言いたげな涼しい顔をしてこっちを見下ろしている。

「おい、お前超能力でもあんの？」

「この間から色んな男の子に同じことを言われたんだ」

「へええ」

俺とおんなじ様なこと考えてる奴はたくさんいるんですね……何考えてるんだろ、あいつら。

「でもそいつらはあんたと違って、トモミに興味を持ってただけだった。一生懸命話聞いているのをなんか違ったふうに捉えてみたい男の子って心理分析とか好きなのかな、悪いくせだと思うんだけどねえ」

「いいや、違う。あんたが何考えてるか本当に分かんないんだ。」

「いや俺は、お前のそれを止めろって言いに来たんじゃなくて、もう少し自粛して欲しいだけだ」

俺はようやくはつきり言うことができて、その時は気分的にすっきりしていた。

ところがすると何故だか、奴の整った顔立ちが崩れ、微かな悲しみが窺えた。

「別に好きで話を聞いているわけじゃないのよ。誰かが話してると、聞かなきゃいけないと思って、そっちへ引き寄せられちゃうの」

目が少し充血している。潤んでいる、といった方が正しいのか。どうやら何か思い出させてはならないことを言ってしまったらしい。

「ま、まあ俺はお前に何があつたかなんて知らないし」

「話したい気分になつたから、聞いてくれない？」

奴は植木の周りにあるブロックの上に立つたまま、空を見上げた。「そうねえ、ちょっと長い話になるけど……」

遠い目をした奴は昔のことを話し始めた。

奴の両親は同じ大学出身で、医学部にいた時に同期として出会ったそうだ。

なんでも奴の母は、父が自分の専門にしている最先端の医療技術

(脳外科だったらいい!) についての話を熱っぽく語る彼に惚れたのだそうだ。

彼らにとつて、ささやかでも二人で学問について語り合う時間はどんな時よりも素晴らしいものだったらしい。

やがて結ばれた彼らは待望の子供である智巳を授かり、結婚生活を始めたのだった。

ところが結婚して五年近い時間が経った頃、それぞれ別々の結局総合病院の勤務医として働くことが決まったお父さんお母さんは、今までよりも格段に忙しくなってしまった。

勤務時間も違っていたため、お母さんはお父さんと離れてしまう時間が増えた。

当然、まだ小学校に上がったばかりの子供も家にほったらかし、とならざるをえない。

「その間どうしてたのさ？」

「市内にあるおばあちゃんの家に残けられてみたい。流石にそこまで覚えてないけど」

奴は、大きくなって物心つくようになってからは、いつも家の中に両親が揃うことが少なかったとも語った。

父と母は最初仲が良かったのだが、やがて会うたびに喧嘩するようになってしまった。

全ては会う時間が少ないというジレンマに起因する、ほんの些細なすれ違いや会話の齟齬が原因だった、と母は言ったらしい。しかし智巳は、それだけではないはずだと語る。

やがて父は週末も家を開けたりするようになった。

母は夜勤のせいで昼間は寝ており、父が知らない間に外出してることなど知らなかったらしい。

それに引き換え父は、母と話さない代わりに智巳によく話したのだという。

それは父なりの“子守”だったのかもしれない、と奴は言う。

「ぶっちゃけ何言ってるか全然分かんないのよ、難し過ぎてさ。今

考えても何か話してた、っていうことしか思い出せないし」

最初は幼かったので、そして何よりもっとも身近にいる存在として父が好きだったので従順に父の言うことを聞いていた奴だった。

それに、父は我が子との時間を共有してそれはとても楽しそうだったというのだ。

でも奴は、小学校高学年に近づくにつれてクラスメートとも触れ合う機会が増えて、次第に億劫になっていった。

家にいると、父の話を聞いてあげないといけないと思って、気が重いのだ。

だんだんと外で同級生という時間が長くなり、放課後もわざと寄り道して家に帰るのを遅らせたりし始めていた。

しかしそこで悲劇が起きてしまう。

その日の朝、母と父は昨日の夜に喧嘩したまま口をきいていなかった。

奴は、静まり返って黙々と食事を進める両親を尻目に、テレビでアニメを見ていた。

するとテレビの置いてあるリビングに父がやってきて、「トモミ、お父さんとお話しよう」と話しかけたのだという。

始め話を聞いていた奴だったが、アニメの方に気を取られて次第に頷く回数が減り、明らかに無視しているような感じになってしまった。

すると父がこう言ったというのだ。

「お父さんの話、そんなに聞きたくないのか？」

奴は、その時「ううん、違うよ、お父さん」と言えば良かったのに、あるうことか「お父さんの言うこと、よく分かんないしつまらない」と言ってしまったらしい。

すると母がやってきて、「あなた、止めなさいよ。そんな話しても、トモミが嫌がってるだけよ」と言い出した。

父はまた始まった一連の母の愚痴を聞き届けると、「そうか……」

と一言つぶやいて、複雑な表情をしながら荷物をまとめて玄関を出ていった。

それつきり、父は帰ってこなかった。

風の便りでは、父は浮気相手とどこか国外へ駆け落ちしてしまっただらしい。

職場には男性しかいなかったので安心していただけなのだが、母が完全に愛想を尽かして父を見張っていなかったのが大きな原因だったそうだ。

もしかしたらヨーロッパの方、恐らくはオランダあるいはベルギーかもしれない、と母は言っていたが、もう真実は闇の中だ。

「なんで聞いてあげなかったんだろう、って今でも思うの」

奴はハンカチこそ取り出さなかったが、涙を堪えていることは分かった。

俺は舗装された土手の上に立ち尽くしたまま、軽く戦慄を覚えていた。

身近にそんなことが起きているなんてそう簡単に信じられなかった。

それに奴がなんで、こんなことを尋常な神経で話していられるのかが分からなかった。

「トモミね、あの時から自分の周りで男の人が話をしていると、自然に聞いてあげる様になっちゃったんだ。もう、いなくなっただけじゃないから」

「そうか……それは辛かったね……」

俺はそれしか言っただけじゃなかった。

……！

そうか、あの時言っただけのは、こういう意味だったのか。

気づくべきでないことに、俺は気がついてしまった。

奴はもうその時から自分の逃れられない運命を悟っていたんだ、そういう確信が心の深い海の底から湧き上がって来た。

それより俺は怖くなった。

図書室へ続く階段はもう直ぐそこだ。

全力でここから逃げ出したい。でも、足が固まってしまっていてそれ
ができない。

「ねえ」

奴が俺の方へと向かって近づいてきた。

俺は、次に奴の言う言葉が予測できるからこそ聞きたくなかった。

「なんでトモミがあんたについてきたか分かるでしょ？」

「さあ、ね……」

奴は話が聞きたかつたんじゃない、探してたんだ。

俺は咄嗟に、生物学的に見て俺たちは一体どういう立ち位置にいるのだろうかとか、これは宇宙の神秘的なだろうかとか、妙に学術的なことを考えて冷静になろうとしていた。

でもそんな非科学的なことって、俺がそう思った次の瞬間、クーラーの効いた室内から外に踏み出した時に立ち込める、あのもわつとした熱気の感触に近い感触が体を覆った。

奴が俺に抱きついたのだ。

「あんたは傍にいてよ。私、あんたが大好きなの」

後ろに手を回した状態で、奴は俺の胸に顔をうずめた。

学ランを着た者同士で抱き合っているのは、いささか不気味な光景だ。

俺は全身に鳥肌が立ちつつも、絞り出すようにこう言った。

「いや、俺ホモじゃないし」

(後書き)

稲垣優さん、ご指摘ありがとうございます。
題名含めて改訂させていただきました。

最後に質問です。

トモミの本当のトラウマは何でしょう？

トモミのお父さんが家を出ていったのは、単にお母さんとの仲が悪くなったからでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409h/>

恋の遺伝子

2010年10月8日15時15分発行